

島へ恋文を

この海の中にいくつかの島があります。苅藻(かりも)島、鷹(たか)島、里島といった島々です。白上の峰から眺めているうちに明恵上人はこれらの島々に渡って見たくなり、舟を仕立てて島に渡りました。

苅藻島には美しい花を咲かせる桜の大樹があったようです。上人はこの桜を見るのが好きで、たびたびこの島に渡ったのです。のちに梅尾の高山寺に住するようになってからも上人はこの島のことを忘れられず、ついに我慢しきれなくなって島宛てに手紙を書きました。それはあたかも生きている人に宛てて語りかけているような手紙でした。

其の後、何条の御事候や。罷り(まかり)出で候ひし後、便宜(べんぎ)を得ず候て、案内を啓(けい)せず候。抑も(そもそも)島の自体を思へば、是れ欲界繁(けい)の法、顕形二色(けんぎょうにしき)の種類、眼根の所取、眼識の所縁、八事俱生の体(てい)なり。色性即智なれば悟らざる事なく、智性即理なれば遍(へん)せざる所なし。理即真如なり。真如即法身、無差別(むしゃべつ)の理、理即衆生界と更に差異なし。然れば非情なりとて衆生に隔て思ふべきにあらず。何に況や(いわんや)、国土身は即ち如来十身の随一なり。盧遮那妙体(るしゃなみょうたい)の外の物に非ず。六相円融無碍法門を談ずれば、島の自体則国土身なり。別相門に出づる時、即ち是れ衆生身・業報身・声聞身・縁覚身・菩薩身・如来身・法身・智身・虚空身なり。島の自体則十身の体なれば、十身互に周遍せるが故に円融自在にして、因陀羅網(いんだらもう)を尽くして、高く思議の外に出で、遙かに識智の境(きょう)を越えたり。然れば華嚴十仏の悟の前に、島の理(ことわり)を思へば、依正無碍・一多自在・因陀羅網・重々無尽・周遍法界・不可思議円満究竟、十身具足、毘盧遮那如来と云ふは、即ち島自体の外に、何ぞ是を求めんや。かく申すに付けても、涙眼に浮びて、昔見し月日遙かに隔たりぬれば、磯に遊

び島に戯れし事を思ひ出だされて忘れず、恋慕の心を催しながら、見参する期なくて過ぎ候こそ、本意に非ず候へ。又其れに候ひし大桜こそ、思ひ出だされて恋しう候へ。消息など遣りて、何事か有り候など、申し度き(たき)時も候へども、物心はぬ桜の許へ(もとへ)、文やる物狂ひ有りななど、いはれぬべき事にて候へば、非分の世間の振舞に同ずる程に、思ひ乍らつつみて候なり。然れども所詮は物狂はしく思はん人は友達になせぞかし。宝州に求めし自在海師に伴ひて、島に渡りて大海に住まし。海雲比丘を友として心を遊ばしめんに、何の足らざる処かあらんや。其れに候うて本意の如く行道して候ひしより、いみじき心ある人よりも、誠に面白き遊宴(ゆうえん)の友とは、御処(ごしょ)をこそ、深く憑み進せて(まいらせて)候へ。年来世の中を御覧じたれば、昔習ひに土を掘りて、物語りせし者在りしぞかしくともや思食す(おほしめす)らん。其等は古き事なり。此の比(このごろ)左様の事は世に似ぬ事にて候へば、申せば望み有るに似たり。然れども和合僧の律義(りちぎ)を修して同一法界の中に住せり。傍の友の心を守らずば、衆生を摂護(しょうご)する心なきに似たり。凡そは(およそは)咎(とが)にて咎ならぬ事にて候なり。取り敢へず候。併(しかし)ながら後信を期し候。

恐惶敬白(きょうこうけいはく)

某月日

高弁状

島殿へ

この手紙を現代語に訳すようになります。

その後、お変わりございませぬか。お別れしまして後はよい便も得られないままに、ご挨拶もいたさずにあります。いったい島そのものを考えますならば、これは欲界にかかわる物であり、姿を顕し形を持つという二つの性格を具え、六根の一つである眼根で見、六識の一つである眼識によって識り、という八つの性格を具えております。五感によって認識されるとは智の働きでありますから悟らない

事柄はなく、智が働くとは理すなわち平等であって、一方に片よるといふことはありません。理すなわち平等であることこそ実相ということで、実相とは宇宙の理法そのものであり、差別の無い理、平等の実体が衆生の世界というのと何らの相違はありません。それ故に木や石と同じように心を持たないからといって一切の生物と区別して考えてはなりません。ましてや国土とは実は『華嚴經』に説く仏の十身中の最も大切な国土身に当たっています。毘盧遮那仏のお体の一部であります。六相が一つのものとなって障りなき法門を語りますならば、島そのものが国土身で、別相門からいえば衆生身・業報身・声聞身・菩薩身・如来身・法身・智身・虚空身であります。島そのものが仏の十身の体(てい)でありますし、十身相互に相即しますから、融通無碍で帝釈天にある宝網一杯となり、知識ではかり得ないものがありまして、我々の知識の程度を越えております。それ故に『華嚴經』の十仏の悟りによって島の道理を考えますならば、毘盧遮那如来といひましても、すなわち島そのものの外にどうして求められましょう。このように申しますだけでも涙が出て、昔お目にかかりました折からはずいぶんと年月も経過しておりますので、海辺で遊び、島と遊んだことを思い出しては忘れられず、ただただ恋い慕っておりながらも、お目にかかる時がないままに過ぎて残念でございます。またそこにありました桜の大木が思い出されてなつかしく慕わしく、お手紙など差し上げてご機嫌如何でしょうかと、申したく思うときもあります。口をきかない桜の大木にあてて手紙を書く物狂いがいるなどと、いわれることを気にして、道理に合わぬ俗世間の習慣に同調しますばかりに、心には思いながら表面には出さずにおりましたが、しかしながら結局は物狂いと思うような人は友達にしないことにいたしましょう。自在海師(かいし)の伴をして島に渡って大海原に住みたい、海雲比丘を友人として心からのびのびと遊べますならば、何の不足がありましょうか。島へ参って思い通りに仏道を修行いたしましてより、立派な人以上に、ほんとうにおもしろい心の通いあう遊びの友とは、貴方であると心に

深くきめ申しております。ずっと永い間、世の中を見つめてこられましたから、昔の真似で土を掘って、その穴に話をして満足した者があったなあと思われるであります。それらは古いことでありまして、近ごろではそのようなことは世の中で普通には行われておりませんので、もしそのような振舞をすれば、心の奥に何か大きな望み事があるように思われましょう。しかし出家僧数名が仲良く戒律を守って、同一の華嚴の法界の中で生活しております。かたわらにいる友の心を大切にしないようでは、生きとし生けるものを仏の光の中に収めとって守ろうとする心が無いようなものでありますので、このように心の中を書状に記して差し上げることは罪とはいわれますまい。取り急ぎしたためました。またお手紙を差し上げたいと心に決めております。

以上謹んで申し上げます

某月日

高弁しるす

島殿へ

使いの僧は「島殿」という宛て書を見て「どこのお島さんか？」と思ったことでしょう。それを尋ねたところ、「紀州の苅藻島じゃ」という返事です。びっくり仰天したものの師命に背くわけにはゆかない。「島のどこへ届けましようや？」と尋ねると、

「只其の苅藻島の中にて、梅尾の明恵房の許(もと)よりの文にて候と、高らかに喚ばはりて、打捨てて帰り給へ」

と言われた。使僧はその通りにしました。ただし、打ち捨てた手紙をもう一度拾って、何食わぬ顔をして持ち帰ってきたのでしょう。おかげで、この手紙の内容を我々も知ることができたのです。

この手紙を読んで思うに、明恵上人は、島や大桜や、海やその他のもの、これを仏教のことばで「器世間」といいますが、そういうものにもちゃんと心があり、命があって、人間と交流しているのだと思っておられたのです。そうでなくてはこんな手紙は

書けません。また思うに、こういう気持でなくては仏法は分らぬのです。ことに華嚴・法相・真言などという仏法の世界は分らないのです。

私が驚くのは、島にあててラブレターを書いたというようなことではありません。この手紙を書いている時の明恵の真剣さです。こんな難しい内容の恋文を貰ったら人間の女だってへこたれるでしょう。それを島に宛てて書くのです。それも全力投球で書くのです。遊ぶのも、戦うのも、恋をするのも、いい加減にやってはいけません。本気で手を抜かずにやらなきゃなりません。だからこそ明恵はこんなこむずかしい恋文を島に宛てて書くのです。この真剣さ、凄いもんだと思います。

島は生きている、島には心があると、信じて疑わないのですからね。それにしても明恵は凄い人です。

明恵が心を寄せたのは島だけではありません。山にも海にも、空にも大地にも、森羅万象、その大元の宇宙そのものにも心があると信じて疑わなかったのでしょう。山川草木、皆生きて大自然の法則に従って動きまわっているのでしょう。こういう世界が分らないと、明恵上人の世界は分らないだろうと思います。(紀野一義)